

1 全体総括

今回の機関評価においては、関係所管部局との連携の下、各試験研究機関の使命・役割を明確にし、組織運営におけるマネジメント上の課題を中心に、現地調査も実施し評価しました。

特に使命・役割については、各試験研究機関の設立の目的、歴史的変遷、専門領域等の違いから、県の計画や推進方針に沿い明確になっている機関もある一方で、県の特徴を踏まえた使命・役割の設定が必要である機関もあります。

県の試験研究機関全体にわたる事項として、今回の評価を通して浮かび上がってきた次の諸点に関し、検討の必要性を指摘することで、全体総括とします。

(1) 中長期研究開発戦略の策定

試験研究機関の使命・役割については、計画や方針を策定し明確になっている機関と県の特徴を踏まえた設定が必要な機関があります。

使命・役割を明確にするとともに、試験研究機関としての中長期研究開発戦略を策定することが求められます。

(2) 職員の高齢化に伴う技術の伝承

現実の問題として各機関が対応に苦慮していますが、伝承すべき技術内容・ノウハウ等、また、人事異動や退職を見越して、事前に計画的に推し進める必要があります。

(3) 研究者の計画的人材育成

研究者の計画的人材育成については、各機関で外部研修への参加等OFF J T教育は積極的に実施していますが、各機関が将来像を描く中で、研究レベルおよび個々の研究者の育成目標を設定し、O J T教育も含めて中長期的かつ計画的に人材育成を図る必要があります。

(4) 研究活動におけるプロセスマネジメントの実施・定着

全機関を比較すると、かなり進んでいる機関がある一方で、遅れている機関が見受けられます。

先行している機関は「研究開発QA体系」の整備等を図ることにより、一層充実していくことを期待します。一方、遅れている機関については、研究者のモチベーション、人材育成、上司とのコミュニケーション、期日管理等、効率的な研究活動の推進に向けた改善が必要となります。

(5) 研究成果の積極的PRと成果の定量的効果把握

すべての機関で、多くの研究成果を上げており県民への貢献も果たしていますが、研究成果のPRや実施後の効果の把握については、一層の工夫が必要であり、一般消費者目線での情報発信に努力を望みます。

(6) 施設の老朽化への対処

全機関共通の基本的な重要問題であると考えます。一部の機関では建て替えの方向で検討していますが、大半の機関では老朽化が激しく、また狭隘で研究に支障を来している所も見受けられます。厳しい財政状況であることは十分承知していますが、是非、あらためて取り上げ対処する様願います。

なお、最後になりますが、前回平成19年度の機関評価における指摘事項については、一部継続案件を除き、おおむね前向きに取り組んでいると思われれます。

2 各試験研究機関別評価結果（主な指摘事項等）

試験研究機関名	項目	評価結果
衛生研究所	使命・役割について 1-(1)-①	衛生研究所は検査業務が多くの割合を占めているが、調査研究業務も検査業務や健康危機対策を講ずる上で重要である。研究機関としての使命を果たす為、調査研究について戦略的な視点から検討すること。
	施設及び設備、予算について 2-(6)-②	施設の老朽化と耐震性の問題により、総合計画の中で建替えが明記されている。そこで建替えに向けて、研究所のポジションを明確にした上で、施設のみならず、人材の充実等を踏まえた全体的な構想を検討すること。
	研究成果のフォローアップについて 3-(2)-①	研究成果は、各市町村の健康施策に役立つ情報として提供されてきているところであるが、その施策が有効性を発揮しているかどうかのフォローアップを行うことにより、さらなる研究課題の発掘や、指導力の強化につなげる等良いサイクルを形成すること。
	その他 3-(1)-②	重点的な調査研究の計画立案や試験検査の実施による成果、研修会やサイエンススクール等の活動は評価できる。
環境研究センター	使命・役割について 1-(1)-①	県の自然的・社会的特徴は明確に示されており、幅広い活動を展開しているが、5つの重点調査研究を実施するための課題を明確にすること。
	研究活動のプロセスマネジメントについて 2-(3)-②	マネジメントの実施に当たっては、期日管理、問題点の把握や上司とのコミュニケーション等、総合的に検討し、書類のフォーマットを工夫した上で実施すること。
	研究開発機能の強化について 5-(1)-②	県として重点的に取り組むべきとして列挙されている課題については、県民の安全・安心につながる時宜に合った重要なテーマである。県の政策にも反映されるよう関連部局、他の研究機関等と積極的に連携し、有用なデータが得られるよう尽力すること。
	その他 3-(1)-④、4-(1)-③	O x 計の校正に関する研究は全国的校正制度の確立に貢献し、またガイドブックや冊子等支援事業、啓発活動、さらに自治体等への指導は評価できる。
産業支援技術研究所	使命・役割について 1-(1)-②	「千葉新産業振興戦略」との関連性も弱く、当該研究機関の過去の歴史に立脚し研究重点領域が2つと限定され、県の産業特性の一部に留まっている。また、技術革新や周囲の環境が大きく変化している中、ア研究重点領域として今後の産業の成長分野への参入支援、イ相談・サービス支援事業においては中小企業技術基盤強化の2つの観点から戦略的見直しを検討すること。
	研究活動のプロセスマネジメントについて 2-(3)-①	プロセスマネジメントについては、活動の進捗状況のみならず、研究途中での早期問題発見・フォロー、上司とのコミュニケーション、研究者のモチベーション、O J T教育等効率的な研究推進に向け総合的な観点から、研究テーマごとの書式を設定し、P D C Aサイクルを回すよう改善すること。
	重点テーマについて 5-(1)-③	他の研究機関とは違い、現在の産業成長分野を意識した運営が重要であるため、県の成長戦略との整合性および所管部局との更なる連携強化を図ること。
	その他 4-(1)-③、⑤	技術相談、依頼試験、機器設備利用などは当該研究機関の特徴であり中小企業支援の役割を担っている。また、講習会や研修会開催、プロジェクト参画等積極的に実施している。

試験研究機関名	項目	評価結果
農林総合研究センター	使命・役割について 1-(1)-①	農業については、県の方針に沿い、県らしさの追求に向け役割は明確になっているが、林業については、農業との対比においてやや不明であり、抱えている課題解決のための取組みを図ること。
	研究活動のプロセスマネジメントについて 2-(3)-①	所定のフォーマットに従い総合的にうまく推進されているが、対象期間が成果の公表までであり、成果の普及・効果把握まで捉えた一連の継続的プロセスを展開し、より効果的に行うこと。
	試験研究推進方針について 5-(1)-①	5つの基本目標は明確になっており、その中の重要なキーワードにブランド化を掲げているが、全国レベルでの認知が基本的要件である。そのための方策は従来とは異なり、よりダイナミックに活動すること。
	その他 2-(3)-②、3-(1)-⑦	農業については県の方針に沿い使命・役割も明確であり、また機関全体としてプロセスマネジメントは最も進んでおり、他の試験研究機関のお手本となる。また多くの研究成果を上げており、産業及び事業者に対して大きく貢献している。
畜産総合研究センター	使命・役割について 1-(1)-①	使命は、千葉県農林水産業試験研究推進方針に沿い、明確になっており、永年にわたり当該研究センターが県の畜産に関し幅広く研究技術開発を行い畜産の発展に寄与してきたことは高く評価できる。しかし、実用開発が主体で、農家に役立つことを主眼としており、「千葉ブランドの確立」を中心に一層の差別化のためには、積極的な外部機関の活用、共同研究を含めて基礎研究についての充実を検討すること。
	研究活動のプロセスマネジメントについて 2-(3)-①	機関内評価委員会に対する報告を中心に実施しているが、現組織で、途中における研究活動の問題の早期発見、OJT、研究者のモチベーション、上司とのコミュニケーション、期日管理等総合的に、効率的な研究活動をすることが必要であり、そのための書式も明確にしたうえで実施すること。
	研究成果のPR・把握について 3-(1)-②	研究成果の効果として、例えば、生産量の増加、農家の収益、品質向上等、出来るだけ定量的に把握し、かつ公表すること。
	その他 1-(2)-④	研究への取組み全体について見ると、地味ではあるが現場で大いに努力しており予算が限られた中で奮闘している姿は良い評価に値する。
水産総合研究センター	使命・役割について 1-(1)-①	千葉県農林水産業試験研究推進方針及び水産振興計画に沿い、全体として使命・役割は明確になっているが、養殖（海及び河川・湖沼）や水産加工、県民からの関心の高い内水面に関して、県水産業の発展や資源、環境の維持・増殖に向けて、県としての特徴づけや現状などについて、なお一層具体的方針を明示すること。
	研究成果のPR・把握について 3-(1)-①	さまざまな研究成果をあげているが、県民の多くはこれらの存在を知らないと思われる。今後、成果については、もっとアピールしていく必要がある。当該研究センターの重要性を多くの県民が認識することができるよう、所管部局と検討するとともに、生産者並びに消費者にどれだけ貢献しているかを測定すること。
	中長期戦略について 5-(1)-②	基本目標は、生産者対応が殆どである。消費者にとって有益な研究や輸入水産物の増加を含め、食の安心・安全に対する研究など、研究の間口を広げて受け入れられる体制を整備すること。
	その他 2-(3)-①、3-(1)-④	プロセスマネジメントは当該研究センターの特徴を加味し、細部までよく配慮され改善されて来ている。また、新品種ノリ「千葉の輝き」の開発を初め、水産業者へ対する指導や情報提供等県の水産業の発展に大きく寄与している。

試験研究機関名	項目	評価結果
がんセンター研究局	組織運営における課題及び解決策について 2-(1)-①	研究スペースの狭隘に起因して廊下に物品が置かれている。本質的な解決はスペース拡大であるが、現状のままでは、安全性の問題のみならず、機器の保全、試料等の保管において、リスク管理の視点から早急に改善すること。
	研究成果のPR・把握について 3-(1)-①	研究活動終了時の成果のバロメーターは、論文と特許であると考えられる。特に、特許については、その権利の確保と行使により成果の社会貢献とともに収入源の1つになる。しかし、知財マネジメントに係る体制については検討不足である。現在は、企業との共同研究により、共同で出願しているようだが、評価や交渉といったプロセスについてはより積極的な検討が必要である。当該研究領域の専門性と知的財産マネジメントの出来る外部人材の確保、または顧問やコンサルタント契約等により対応を早期に図ること。
	今後の研究の方向性について 5-(1)-①	現在の研究の方向性は、研究局の使命に対応するために大変に重要なものであり、現在の段階では、期待される成果を生み出している。ただし、とくに、がんの基礎研究から創薬への流れに関しては、今後、益々、国際的にも競争が激しくなる分野であり、橋渡し研究領域のより先進的な研究システムの確立と、それを用いた企業との共同研究を推進すること。
	その他 3-(1)-②	県唯一のみならず国内、海外を含め最先端研究は世界トップレベルであり、がん登録の推進や分子疫学コホート研究の実施を通し、千葉県のがんの実態を明らかにしている。さらになんがん治療薬の創薬に向け、医療技術の研究開発に関しても大きな成果を上げている。